

発展科目「特別支援教育の授業デザイン」における授業展開とその効果の検討

—インプット-実践・体験-アウトプットモデルを踏まえた学習サイクルを通して—

Conducting an advanced course called “designing a special needs class” and examining the effects of using a learning cycle model of input, practice, experience, and output

土岐賢悟・菊地一文

Kengo TOKI, Kazufumi KIKUCHI

弘前大学大学院教育学研究科

Graduate School of Education, Hirosaki University

要 旨

発展科目「特別支援教育の授業デザイン」における効果的な授業内容の取り扱いと展開の在り方について検討することを目的に、受講者のワークシート、授業における発言や課題等から分析を試みた。その結果、講義内容を踏まえた演習や特別支援学校での授業見学や体験を取り入れ、その報告や省察、共有等を行うことによる、「インプット-実践・体験-アウトプット」モデルのサイクルを通して、認知・行動・ICT活用等の特別支援教育において必要とされる専門知識の咀嚼に加え、主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた授業づくりに向けた気付きと理解の深まりが確認された。また、現職院生と学部卒院生の学び合いを通じた相互作用が確認され、今後の授業改善及び充実のための示唆を得ることができた。

キーワード：授業デザイン、学習サイクル、学び合い

I. はじめに

新学習指導要領では、各教科等の指導において、資質・能力が偏りなく育成されるよう、児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善による効果的な指導を行う必要性が示された。これは児童生徒の障害の有無にかかわらず、すべての児童の学びに求められるものである。

中央教育審議会は、答申第228号(2021)(以下、本答申)において、2020年代を通じて実現を目指す学校教育を「令和の日本型学校教育」とし、その在り方を示した。本答申では、全ての教師に求められる特別支援教育に関する専門性として以下の事項を挙げている。

- 障害の特性等に関する理解と指導方法を工夫できる力や、個別の教育支援計画・個別の指導計画などの特別支援教育に関する基礎的な知識、合理的配慮に対する理解
- 障害による学習上又は生活上の困難について本人の場にとって捉え、それに対する必要な支援の内容を

一緒に考えていくような経験や態度

- 多様な教育的ニーズのある子供がいることを前提とした学級経営・授業づくり

また、「目の前の子供の障害の状態等により、障害による学習上又は生活上の困難さが異なることを理解し、個に応じた分かりやすい指導内容や指導方法の工夫を検討し、子供が意欲的に課題に取り組めるようにすることが重要である。」としている。この個に応じた指導を学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」であり、「協働的な学び」と一体的な充実を図ることが重要であると示している。

加えて答申では、「個別最適な学び」「協働的な学び」の一体的な充実のため、GIGAスクール構想による「1人1台端末」環境下でのICTの効果的な活用と相まって、児童一人一人の学習内容の理解度・定着度の向上と学びの高度化を図ることの重要性も示している。さらにICTの活用には当たっては、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、各教科等において育成すべき資質・能力等を把握し、心身に及ぼす影響にも留意しつつ、ま

ずはICTを日常的に活用できる環境を整え、児童生徒が「文房具」として活用できるようにし、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に生かしていくことが重要であるとしている。

以上のことから、特別支援教育の知見を踏まえた、多様な教育的ニーズのある児童生徒に対応する授業づくりにおける専門性向上は、喫緊の課題となっていると捉えられる。

II 発展科目「特別支援教育の授業デザイン」について

1 科目「特別支援教育の授業デザイン」の概要

(1) カリキュラム体系における位置付け

発展科目「特別支援教育の授業デザイン」(以下、「本科目」と記す)は、本専攻の発展科目として、「特別支援教育実践コース」の選択科目(2単位)として1年次後期に開講しており、十分な現場経験を持つ実務者教員と研究者教員によるチーム・ティーチングによる指導体制で対応している。また、特別支援学校に勤務又は小・中学校において特別支援学級等を担当している現職院生も履修可能であることから、現職院生と学部卒院生が共学することが可能な科目である。本科目は、特別支援教育実践コースの学部卒院生だけでなく、フィールド実習を通して特別支援教育に関する専門性向上の必要性を感じている学校教育及び教科教育実践コースの学部卒院生も受講を希望し、履修している。

(2) 授業目標及び実施体制

本科目の具体的到達目標は、学部卒院生が「知的障害等のある児童生徒を対象に、個別や小集団等での指導形態において、望ましい授業づくりのあり方を説明できる」、現職教員院生が「知的障害等のある児童生徒を対象に、個別や小集団等での指導形態において、授業を計画、実行、評価できるとともに、望ましい授業づくりのあり方を分析的に検討できる」としている。

また、本科目の実施体制は、協議や演習を行うための十分な時間確保が必要であるため、2コマ続きの時間枠で設定し、7.5回の実施としている。なお、全15回の授業の概要とキーワードについては、「2 授業展開の実際」において概説する。

(3) 科目の展開及び授業展開における工夫

本科目の受講院生は現職院生が2名、学部卒院生が4名の計6名であった。以下に実際の授業を展開する上で留意した点について紹介する。

①学びのサイクル

科目全体を通して留意したのは、「インプット」→「実践・体験」→「アウトプット」の学習サイクルを踏ま

えて構成したことである。

まず、特別支援教育における授業デザインの要素や授業に必要なアセスメント情報の収集と分析等の講義・演習を行い、それを基に特別支援学校での参観・体験実習を行った。そして、その結果を踏まえて討議を行い、指導環境及び手立ての再検討を行った。次いで心理アセスメントの実施や行動分析学の知見を踏まえた自己の行動分析、ICTアプリの活用演習等についても同様のサイクルで実施し、最終的にはこれらの検討結果を基に模擬授業を実施し、授業について討議するなどして、理論を踏まえて実際的に学べるようにした。

②思考のサイクル

授業展開において工夫したことは、各授業の事前に受講院生に課題を与えて個人思考させ、それを授業で発表することにより全員で共有し、討議するという「個人思考」→「共有」→「集団思考」の思考サイクルである。これにより、自らの知識と経験で思考したことが、他者の視点や考え方と比較・検討することにより再構成され、各自が新たな知見を得ることを期待した。

③特別支援教育の視点を取り入れた授業改善

本科目では、特別支援教育の視点を取り入れた授業をデザインして模擬授業を行い、その授業について検討する場面を設定したが、学部卒院生の場合は実習校で既に実施した授業、現職院生の場合は勤務校で既に実施した授業を基にした。これは、新たに一から授業を計画するよりも、実際に自分で行った授業を振り返り、実際に観察された児童生徒の反応や、自身の教師としての働きかけ、授業構成の在り方などを特別支援教育の視点で改めて見つめ直すことにより、改善が必要な点を実感しやすいと考えたためである。

④多様な学校種別・教科等の視点

本科目の受講院生6名の学校種別及び専門は以下のとおりである。

- A, 学部卒院生, 小学校(道徳)
- B, 学部卒院生, 中学校(国語)
- C, 学部卒院生, 中学校(数学)
- D, 学部卒院生, 特別支援学校
- E, 現職院生, 特別支援学校
- F, 現職院生, 特別支援学校

それぞれの専門や学校種別が多様であるため、その良さを生かし、多様な教科及び学校種別の視点で討議することの意識化により、いわゆる指導・支援の「引き出し」を増やすことができると考えた。

⑤理論やデータを踏まえた言語化・可視化

自らが実践して得られた結果について、過去の授業で得られた経験や知見を基に解釈したり、データを収

集してその分析結果を基にして考察したりするなど、実践についての仮説や根拠を言語化・可視化するスキルを身に付けることができるよう、授業を計画した。

2 授業展開の実際

(1) 各回の授業概要

①10月6日(水) 1・2限

第1回 特別支援教育における授業デザインの要素とプロセス

第2回 知的障害等のある児童生徒の実態を踏まえた指導目標・指導内容等の選定

まず、第1回では、特別支援教育における授業デザインの要素とプロセスについての講義を行った。「授業デザイン」とは何か、「授業力」とは何かについて、実態把握と目標設定、内容の取り扱いや指導・支援方法の工夫等に関する特別支援教育における独自性や、インストラクショナルデザインといった共通性を踏まえつつ、授業づくりについて改めて捉え直す内容とした。

その上で、受講院生に課題①「『授業とは何か』について改めて言語化する」(図1)、課題②「マンダラートを使って『よい授業』の条件を可視化する」(図2)を提示し回答を求めた。なお、この課題は本科目を通しての受講生の変容を見るため、最終回にも実施した。

改めて「授業とは何か」について言語化してみよう

授業とは

(のようなもの)である。

なぜなら

からである。

図1 課題①

マンダラート(今泉, 1987)を使って、「よい授業」について考えてみよう

	よい授業とは	

図2 課題②

第2回では、本科目の主な対象である知的障害の定義、学習上の特性、教育的対応の基本、教育課程などの基本的内容を取り上げ、具体的な実践事例を基に理解を促した。

②10月13日(水) 1・2限

第3回 特別支援学校(知的障害)における授業の実際Ⅰ(附属特別支援学校での授業参観・体験)

第4回 特別支援学校(知的障害)における授業の実際Ⅱ(附属特別支援学校での授業参観・体験)

第5回、第6回の授業で取り上げた「アセスメント情報の収集と分析」については、当初は附属特別支援学校での授業参観の前に実施する計画であったが、附属特別支援学校の行事との調整の結果、変更となり、授業参観を先に実施することとなった。

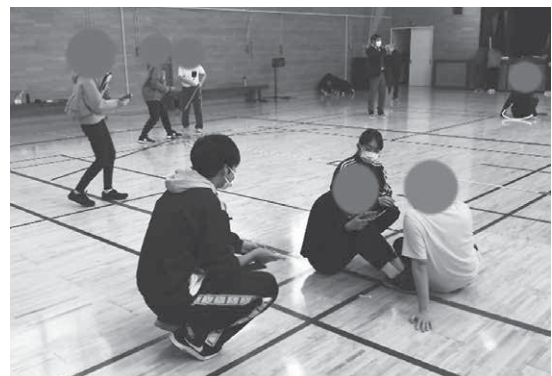


図3 授業参観の様子(高等部)



図4 授業参観の様子(小学部)

授業参観は、受講院生6名を小学部、中学部、高等部にそれぞれ2名ずつ配置し、2・3校時の授業を体験した。単なる参観ではなく、既習事項を踏まえ、必要に応じて児童生徒とかかわりながら、授業内容、児童生徒の様子を観察し考察するようにした。(図3, 図4)

③10月20日(水) 1・2限

第5回 知的障害等のある児童生徒のアセスメント情報の収集と分析の実際Ⅰ（認知面へのアプローチ：心理アセスメントの理論）

第6回 知的障害等のある児童生徒のアセスメント情報の収集と分析の実際Ⅱ（行動面へのアプローチ：行動分析学の理論）

第5回では、標準化された心理検査の代表的なものとしてWISC-IV、KABC-IIを取り上げ、アセスメント結果の解釈の基本や、指導・支援への活用について教授した。また、第6回では、応用行動分析学の理論について取り上げ、「行動」とは何かについて三項随伴性や4つの基本随伴性を基に教授した。加えて、気になる行動に対するアセスメントや介入の方法としてABC分析や課題分析、MAS、インターバルレコーディング法やベースライン法について概説した。

④10月27日(水) 1・2限

第7回 知的障害等のある児童生徒のアセスメント情報の収集と分析の実際Ⅲ（授業参観・体験を基にした協議、事例検討）

第8回 知的障害等のある児童生徒のアセスメント情報の収集と分析の実際Ⅳ（心理アセスメントの実際：WISC-IV、KABC-II）

第7回では、第3回及び第4回で実施した附属特別支援学校での参観・体験について、第5回から第6回までの授業の視点を踏まえて、児童生徒の行動や、それに対する教師の関わりを分析した結果を発表し合い、それをもとに協議を行った。

第8回は、二人一組でそれぞれが検査者、被検者になって、実際にWISC-IV、KABC-II、DN-CASを体験した。(図5)



図5 心理アセスメント体験の様子

⑤11月10日(水) 1・2限

第9回 知的障害等のある児童生徒の指導環境及び手立ての検討（心理アセスメントを生かした指導・支援の見直し）

第10回 特別支援教育におけるICT活用の意義

第9回は、第8回に体験した心理検査について、以下の内容を踏まえて受講者がプレゼンテーションし、協議を行った。

- 1 実施した心理アセスメントの概要について説明する
- 2 自分たちが実施した心理アセスメントの課題の中から数点を取り上げて解説する
- 3 被検者（学習者）の立場で考えたことや指導する側として考えたことについて省察する
- 4 各自の授業における改善方策や今後の方向性について述べる

第10回は特別支援教育におけるICT活用の意義について期待される効果と、その活用により実際に効果があった事例として「生活習慣や学習習慣の定着」「コミュニケーション場面の拡大」「書く力、話す力の向上」などの具体的な事例について取り上げ、概説した。

⑥11月17日(水) 1・2限

第11回 授業における効果的なICT活用の検討（アプリを活用した授業の検討）

第12回 特別支援学校（知的障害）における授業づくりⅠ（主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた授業等の改善）

第11回は、アプリケーションを活用した効果的な授業の検討について、以下の内容を踏まえて受講者がプレゼンテーションし、協議を行った。

- 1 どんな授業にするのか、テーマを設定する。
- 2 自分が実際に使用している、あるいは知っているアプリ、あるいは新たにアプリを調べて2つ程度挙げて、その機能を解説する
- 3 チョイスしたアプリを、授業でどのように活用するか、その方策について提案する。
- 4 知的障害のある児童生徒の学習活動における、ICTの活用の可能性や課題について自分の考えを述べる。

第12回は、障害のある児童生徒にとっての主体的・対話的で深い学びとは何かについて、キャリア発達の視点も踏まえて教授した。

⑦11月24日（水） 1・2限
第13回 特別支援学校（知的障害）における授業づくりⅡ（授業デザインのプレゼン）

第13回は次回（第14回）で行う模擬授業について、以下の内容を踏まえて受講者がプレゼンテーションし、協議を行った。

- 1 本授業での既習事項を踏まえて構想した授業について発表する
- 2 質疑応答
- 3 教員が講評・コメントを述べる

⑧12月1日（水） 1・2限
第14回 特別支援学校（知的障害）における授業づくりⅢ（模擬授業）
第15回 特別支援教育における望ましい授業づくりに関する討議、まとめ

第14回は、第13回で発表した授業の構想に基づいて、受講者が以下の流れで模擬授業を行った。

- 1 各自の授業デザインに基づいて模擬授業を行う
- 2 授業者による省察を行う
- 3 質疑応答
- 4 教員が講評・コメントを述べる

第15回は第14回で実施した模擬授業を振り返るとともに、本科目を総括して、以下の流れで討議と省察を行った。

- 1 模擬授業について省察する
- 2 望ましい授業づくりに関して討議する
 - ・授業づくりにおいて大切にしたいこと
 - ・本授業を通して特に大事だと思った視点
 - ・現在の授業づくりにおける自己の課題
- 3 今後の授業づくりに関する各自の展望を述べる
- 4 教員が講評・コメントを述べる

(2) 具体的な授業展開の実際

実際の具体的な授業展開と受講院生の学修の様子について、第7回及び第13回の例を以下に記す。

〈第7回〉

知的障害等のある児童生徒のアセスメント情報の収集と分析の実際Ⅲ（授業参観・体験を基にした協議、事例検討）

（2021年10月27日（水） 1・2限）

1) 本授業の目的と概要

第3回・第4回授業（2021年10月13日）で実施した、附属特別支援学校での授業参観・体験について、以下の課題を課し、まとめたものを発表した。課題につい

ては授業参観・体験前（第2回終了時）に以下のように示し、課題を意識して取り組ませるようにした。

- (1) 自身または他者の気になる行動についてABC分析や機能分析を行う。可能であれば介入の記録データを取る。
- (2) 附属特別支援学校での見学を通して認知・行動に関する事例解釈を行う。
- (3) 各自の授業づくり及び授業改善の可能性について、具体場面を挙げて考察する。

2) 院生Dの作成資料から

院生Dの作成資料を紹介する。院生Dは、課題(1)の気になる行動として「起床時、布団からなかなか出られない（布団の中に入っている）自身の事例」を挙げ、「なぜ起床後すぐに布団から出ることができないのか」ABC分析（A：先行条件，B：行動，C：結果）を試みた。そして、「布団から出る」という行動の生起に向けた方策として、起床時前に暖房が入るように設定することで布団から出ることができるのではないかと仮説を立て、実行した。介入記録の結果から、「暖房を入れて部屋を暖めることにより、布団から出る時間が短くなっていることを読み取れるが、前日の状況（夜更かしなどの要因）、当日の状況（実習・休日などの要因）による影響も大いにあることが考えられるため、一概に暖房を入れることの効果と言えるかは難しいようにも感じる。」「ベースライン期において、生活の状況や天候・気温、記録をとっている、という意識が少なからず自らの行動に影響しているように感じた。ベースライン期の精度を求めるとすればより長い期間記録をとる必要があるように感じた。」等の解釈をしていた。ABC分析のフレーミングには十分とは言えない部分もあったが、行動への介入を図るための方術の一つとして、手ごたえを感じていたようだった。

課題(2)の附属特別支援学校での実習では、小学部のある一人の児童に注目し、思い通りにならない場面で暴言が多くなる児童Aの認知・行動について観察した結果の解釈を試みた。院生Dは、事実の観察として、「児童Aの暴言を減らすことをねらい、自立活動の時間に『やさしいことば』・『よくないことば』を児童Aが目で見えて・声に出して確認していた。」「授業が終わる度に教員と児童Aで「やさしいことば」・「よくないことば」が何回あったのか確認して◎・○・△で自己評価と他者評価を行っていた。」ことを挙げた。そしてその観察の結果から、「『やさしいことば』・『よくないことば』を児童Aが目で見えて・声に出して確認することで継次処理様式と同時処理様式を両方取り入れて

おり、認知しやすい提示になっていた。」「授業が終わる度に教員と児童Aで自己評価と他者評価を行うことで振り返りと次の授業への意識づけになることが考えられる。」「『やさしいことば』・『よくないことば』は児童Aが日常から使っている言葉をリストアップして、必ず「やさしいことば」をカウントできるようにすることで児童A自身が自分の良いところ気づくことができていた。」と考察していた。

3) 授業を振り返って

各院生は、普段の自分の何気ない行動や気になる行動について、応用行動分析学の視点で分析することにより、行動が起こるためには必ず「きっかけ」があり、行動後に結果として起こることが、その行動を強化あるいは弱体化につながることに意識することができた。そして、附属特別支援学校での授業参観・体験で目の当たりにした児童生徒の行動の意味を、事実として表れている行動だけではなく、「なぜその行動が起こったのか」「なぜその行動が繰り返されるのか」、そしてそれらの仮説を踏まえた「行動を強化するあるいは弱体化させる手立ては何か」を意識して、児童生徒の行動観察を行っていたことが発表で示された。その意味で、自らの行動を応用行動分析学の視点で分析することを経験したうえで、実際の児童生徒の行動について考えるという授業の流れは、授業参観・体験における児童生徒を観察する視点をより明確化することにつながったのではないかと推察する。

(第13回)

特別支援学校（知的障害）における授業づくりⅡ （授業デザインのプレゼン）

(2021年11月24日(水) 1・2限)

1) 本授業の目的と概要

本科目第12回までの授業で得られた知見を基に、次回（第14回）で行う模擬授業を実施するにあたり、第12回授業終了後に以下のように課題と授業の流れを事前に示し、取り組むようにした。

(1) 本授業での既習事項である以下の項目を踏まえて授業を構想

- ・知的障害のある児童生徒の学習上の特性等
- ・知的障害教育における教育課程
- ・心理アセスメントの知見
- ・行動分析学の知見
- ・ICTの活用 等

(2) 構想した授業に関するプレゼン発表（一人10分）

(3) 質疑応答

(4) 教員から講評・コメント

そして本授業では、各自が構想した模擬授業について、プレゼンテーションを行った。

2) 院生Eの作成資料から

院生Eの作成資料を紹介する。院生Eは、知的障害特別支援学校高等部「情報科」の授業を構想した。

①授業について

情報機器は、適切に活用できれば利便性の向上につながる一方、情報モラルを十分理解しないまま使用することで、トラブルに巻き込まれることもある。本時は、インターネット上に画像や文章を投稿する際の注意点を踏まえ、具体的な改善点を考えていく。SNSの特性や長所にも目を向け、よりよい使い方について考える機会としたい。

②対象

知的障害特別支援学校高等部1学年（男子3名、女子2名）

③生徒の実態

- ・全員がスマホを所持している。入学を機会に使い始めた生徒が多い。家庭管理においても実態がそれぞれである。
- ・全員が、LINEを使用している。数名がInstagram、Twitter、TikTok等のSNSを利用しており、使い方にさまざまな課題が残っている。
- ・現実の友達と仮想の友達との境目が無い生徒もいる。

④授業改善の視点

これまでの授業でありがちだったのは「〇〇はダメです、トラブルになります」「ルールを守る」といった教師からの一方的な提示により、生徒は他人事として捉えてしまい、授業の目的を十分に達成することができなかった。今回の模擬授業では、生徒自身が自分事として、実生活に反映できるような指導にしたい。

3) 院生Eの授業構想

院生Eは、対象生徒5名の学習上の特性を仮定し、図6のように授業を構想した。個々の特性に対する手立てとして「ICT機器の活用」「クイズ形式を取り入

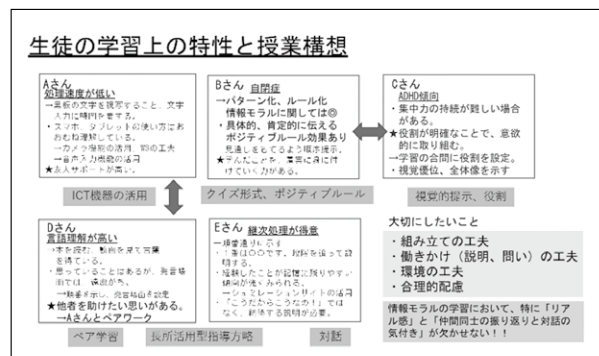


図6 院生Eの授業構想

れる」「ポジティブルールを意識した関わり」「視覚的提示」「役割の設定」「ペア学習」「対話」など、長所活用型の指導方略を意識することとした。特別支援教育の視点を踏まえ、主体的・対話的で深い学びを実現するために、本科目での既習事項を丁寧に織り込んで構想されていた。

4) 授業を振り返って

各院生は、以前に実施した授業を、既習事項を視点として改めて見直すことで、児童生徒一人一人の学びにくさや理解のしづらさに目を向け、全員参加のためにどのようにしたら学びやすくなるかを意識して授業を構想していた。

Ⅲ 考察

(1) 授業の感想に見る本科目実施の成果

本科目実施の成果について、受講院生の授業の感想を基に考察する。

①「インプット」→「実践・体験」→「アウトプット」の学習サイクルで構成したことによる成果

院生から「特に印象に残っていることは、発語がない生徒や知的発達の遅れのある生徒など、様々な『思いを発信すること』に困難を感じている生徒が、思いをもちながらも伝えられずにもがいていることである。生徒の認知がどの程度進んでいるかを認識し、授業を通してできることが一つでもないかと模索していくことが教員の仕事であると改めて感じた。」などの感想が得られた。「インプット」した理論を基にした視点で「実践・体験」することで、「実感」となり、それを授業づくりにつなげようとしていることが分かる。

また、「実際に認知検査をやってみた経験が貴重」「やはり実態把握が重要であると感じた。今回、いくつかの心理アセスメントを実際に体験してみたが、得られた結果を参考にして、普段の観察や保護者からの情報など、様々な視点からみて、目標を設定していかなければならないと感じた。」という感想が得られ、実際に検査者と被験者の立場で体験することによってアセスメントの重要性への気づきがあったことも分かった。

また、「本講義で学んだ『応用行動分析学』や『知能検査』、『同時処理か継次処理』、『好子・嫌子の出現・消失による強化・弱化』をはじめとする理論や知識は、これまで見てきた多様な子どもたちの姿に重ね合わせて考えることで、より多様かつ具体的な手立ての構想を行うことができると感じる。」「①子供の認知の流れ②アセスメントの活用③ICTの活用の3つを学んだことで、『生徒それぞれに焦点を当ててその手立てを

考えていく』という特別支援の理念を体感することで、具体的に考えられるようになった。」という感想が得られた。授業づくりをするうえで、自分の「感覚」に頼るのではなく、どのようにしたら「理解しやすいのか」「主体的に授業に取り組めるのか」について、認知・行動・ICT活用等の特別支援教育において必要とされる専門知識を咀嚼しながら、これらの視点で考えることの大切さを学んだことが推察された。

さらに、「今までの自身の授業実践の改善点と既存利点に気づくことができた。授業改善の必要性や学習者主体の授業づくりへの意識が一層高まった。一人の支援がみんなの支援、アセスメントについてなど、まだまだできることがあった。」「改めて教材研究の大切さを感じた。子どもの実態を捉え、何を教えるのか、どの教材で学ぶのか、めざす子どもの姿は、など扱う教材について教師自身が思いや考えをもつことから授業づくりが始まると感じた。」「授業づくりという点においては、『障害の有無を問わず、一人一人の子どもたちが何かしらの困難性を抱えている』という視点を大切にしたい。」などの感想が得られた。これらの感想からは、自分の授業を振り返り、足りなかったもの、必要な視点など、授業改善の必要性を感じたことが推察された。これらのことから、学部卒院生が1年次前期に実習校での観察実習及び集中実習での授業実践を経験したうえで本科目を受講することにより、多くの気づきを得られたものと推察された。その意味で、1年次前期からの教育実習の設定及びその経験を専門的視点で改めてブラッシュアップするための授業を後期に設定するという、カリキュラム・マネジメントの効果があつたと捉えられた。

②主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた授業づくりに向けた気づきと理解の深まり

院生から「これまで幾度となく耳にしてきた『ICT活用』『個別最適化』『主体的・対話的で深い学び』という重要なワードも、『特別支援教育』という視点から改めて捉え直すことによって、より幅広い視野をもって、その言葉の意味内容や意義を咀嚼することができた。」「全員がつまずきを克服し、目標に向かう過程の中で、『達成感や自己成就感を得ながら、学ぶことの意義や面白さを実感できる授業』を目指していきたく強く感じる。子どもたち一人一人に寄り添いながら、内言の読み取りも含めた深い生徒理解を軸にししながら、本講義で学び得た知識を生かした授業づくりを進めていきたい。」という感想が得られた。学びの主体は児童生徒本人であるということを土台にしながら「なぜ・何のために学ぶのか」「他者とのかわり

を通して考えを広げ、深めること」「学びの過程と見方・考え方を働かせる重要性」を意識しながら授業づくりに取り組んでいる姿が捉えられた。

③現職院生と学部卒院生の学び合いを通じた相互作用
学部卒院生からは、「他の受講者の意見から、特に『即時的に褒めることや受容すること』や「キャリア教育と関連させること』の重要性を実感することができた。特別支援教育を専門とするミドル（現職院生）の先生方の考えからも数多くのことを学び得ることができた。」という感想が得られた。

現職院生からは、「Fさんの経験豊富な授業展開と技量の高さ、Dさんの状況に応じて子どもの思いを引き出す上手さ、Aさんのプレゼン力と道徳への熱量、Cさんの多様な視点と深い考察、Bさんの子どもたちのためにと励む純粋な姿と吸収力。多くの学びを得た時間となった。経験年数、校種等を超えて学び合えることが新鮮であった。」という感想が得られた。現職院生と学部卒院生の学び合いや多様な教科・学校種別等の視点を得たことで多くの学びを得たことが推察された。

また、「勤務校でも、若手とベテラン、中堅が授業を見合い、雰囲気よく情報共有できたらよいと実感した。」という感想に見られるように、児童生徒への指導経験が少ない学部卒院生が、指導経験を積み上げてきた現職院生から学んだ様子、また、逆に現職院生が学部卒院生の柔軟な発想や真摯な姿勢から学んだ様子も窺え、現職院生と学部卒院生が共に学ぶことによる効果が見られた。

さらに、院生から「他の教員と共通理解が図られていくことで、授業時間数が多い場合でも、個別に対応する児童生徒が複数の場合でも、学習活動を進めていくために協働することができると感じた。」という感想が得られ、思考を共有し、集団思考することの大切さを実感することにつながったと捉えられた。

加えて、「院生室で、自然と授業の振り返りが始まり、よかったところを認め合ったりする機会が多く見られ

た。」という感想が得られ、授業を終えた後も「学び合い」により、学びを深めようとしていたことが確認できた。

(2) 課題①「『授業とは何か』及び課題②「マンダラートを使って『よい授業』の条件を可視化する」の変容に見る成果

第1回授業時に作成を求めた2つの課題について、本科目終了時に改めて作成を求めた。結果は以下のとおりであった。なお、課題②のマンダラート(図2)は二層目まで実施した。1テーマに関して一層目で8要素を書き出し、書き出した8要素について、二層目でさらに8要素を書き出したため、すべて要素を書き出すと一人当たり全64要素のデータが得られたが、本稿では一層目のみをカテゴリー分類した。

課題①(図1)の結果(表1)を見ると、第1回時は、一般論的で、授業を第三者の立場から言語化している回答が多かったが、第15回時には、教師として意図的に児童生徒に働きかけ、成長させたいというキーワードが多く並んでいる(下線部)。

このことから、授業を一人ひとりの教育的ニーズに合わせて「デザイン」し、児童生徒の持てる力を最大限に発揮するための授業づくりが必要であるという、本科目の目指すものが言語化されていると捉えられた。

また、課題②(図2)の結果(表2)では、第1回時は、すべての院生が一層目8要素の記入欄すべてを埋めることができなかったが、第15回ではすべての院生が8要素の記入欄すべてを埋めることができていた。さらに、よい授業の構成要素として、応用行動分析学の視点、主体的・対話的で深い学びの意識が見られるようになった。また、授業づくりを授業者の視点だけではなく、学習者の視点で考えるようになっていくことも把握できた。15回の授業を通して、授業づくりの視点が、学びの主体である児童生徒に向けられるようになったことは、授業の効果であると推察された。

表1 「授業とは何か」の言語化の変化

院生	第1回	第15回
A	授業とは「教師が教え、子どもが学ぶ場やその営み」である。なぜなら、「どちらか片方では成り立たない、相互行為としての意味合いを有する」からである。	授業とは「子ども(学び手)を育てるためのもの」である。なぜなら、「誰にでも学ぶ意志や能力、権利があり、それを支える必要がある」からである。
B	授業とは「生業を授けるもの」である。なぜなら、「子どもたちは授業で学ぶことを通し、キャリア形成の方向付けを行う」からである。	授業とは「目的に向かった意図的なはたらきかけ」である。なぜなら、「授業を通して子どもたちにどのような姿になって欲しいか(目的)を思い描き、それに基づいたはたらきかけ(指導・支援)を行う」からである。

C	授業とは「教師と生徒の架け橋」である。なぜなら、「個性を發揮し互いを理解する時間」だからである。	授業とは「パズルのようなもの」である。なぜなら、「 <u>生徒の実態に合わせて組み替えていくものであり、やり遂げた時に様々な様相を見せてくれる</u> 」からである。
D	授業とは「子どもと教師の成長の場」である。なぜなら、「様々なものを獲得し、価値付け、人間関係を構築する」からである。	授業とは「プロスポーツの試合のようなもの」である。なぜなら、「 <u>生徒のパフォーマンスを最大限に引き出す場</u> 」からである。
E	授業とは「人が育ち、人を育てる場、夢を育む場」である。なぜなら、「教える-学ぶの相互関係により、両者が未来に向かって成長できる」からである。	授業とは「カレーライスのようなもの」である。なぜなら、「(子どもたちにとって欠かせないものであり)多様な生徒と多くの教師が互いになじみ合い(教え教えられ)、学びや夢が広がり深まる」からである。
F	授業とは「学び合い、認め合い、高め合い」である。なぜなら、「教師-子どもの双方向で行う表現の場」からである。	授業とは「 <u>学びあい、認め合いの場、お互いを理解し合う場</u> 」である。なぜなら、「教師も子どもも同じゴールへ向かって思考する双方向のやりとりの中で思いを広げ深める」からである。

表2 「よい授業とは」の構成要素についてマンダラートに記載されたワード一覧

カテゴリー	第1回(初回)	第15回(最終回)
アセスメント	<ul style="list-style-type: none"> 子どもを見ること 	<ul style="list-style-type: none"> 認知に働きかける(継次処理が得意か、同時処理が得意か) 行動に働きかける(何をすれば行動が強化されるか弱化するかまた、これまでの積み重ねではどうか)
望ましい授業像	<ul style="list-style-type: none"> 学習課題が適切、見通しがもてる 授業のねらい(ゴール)が明確 個に応じた支援が適切である よい教育と良い学習 学ぶ意義が分かる、 わかる ・生徒が理解できる 「わかる」、「できる」がある 安心して過ごせる環境 興味関心を引く 子どもの求める学びがある 子どもと教師の息があっている 伝えたいことが伝わる できるようになる ・面白い 楽しい(2) ・次が楽しみ 協働的に学ぶ ・達成できる 深く思考し、生徒が思考している 心が惹かれる 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒にとって意味がある ・情報が伝わりやすい 言語活動が充実している ・新たなことが身につく 興味が湧く ・生徒の実態に即している 生徒が活躍する ・粘り強く取り組める 生徒が自分で何をするか理解している、楽しく学べる 楽しい(2) ・達成感が感じられる 全員参加 ・全員が分かる ・参加している授業 分かる→できる ・できる→分かる ・わかる(2) わかりやすい(2) ・できる(3), 輝ける、子ども(の目)が輝く 主体的な学びがある(学びにどんな意味があるのか?世界との対話) 対話的な学びがある(他者との学び、他者からの学び、他者と広げ深める学び)、他の生徒とかかわる、 深い学びがある(経験を意味づけする成長、自己との対話)、ゴールが明確、一定の緊張感がある授業 安心感のある授業(見通しがもてる 自分の学びの意味が分かる) ・安全・安心 今までの学びをいかせる ・授業を超えて生かされる
授業者の手立ての視点	<ul style="list-style-type: none"> 教材研究 ・魅力ある教材 省察 ・発問 ・問い 信頼関係(2) ・手立て 充実した指導・支援(2), 学習成果や課題評価(まとめ、振り返り) ・関心意欲 ・学び 評価 ・めあて ・目標 達成感 ・見通し 	<ul style="list-style-type: none"> 子どものつまずきにアプローチをする、 子どもの「<u>できる</u>」を伸ばす 難しすぎず簡単すぎない課題、興味・関心を引立てる 教えやすさだけでなく、学びやすさの視点 生徒への手立てが十分である学びの連続性 教科の専門性がある ・発問 ・問が立つ 板書(2)やワークシートの工夫 教材 ・魅力的な教材教具 ・評価 ・対話 めあて ・目標(2)(ゴールの設定)
学習者の手立ての視点		<ul style="list-style-type: none"> 経験を生かす ・結びつける ・経験から生かす 振り返る ・「できる」や「分かる」をさらに活用する 学びをつなげる ・認知に働きかける ・ICTの活用 書く、読む、話す、聞くの選択肢を広げる 子どものつまずきにアプローチをする 背景を見る ・言葉や活動への配慮、 行動に働きかける ・「できる」を伸ばす
子どもの捉え方	<ul style="list-style-type: none"> 子ども理解 	<ul style="list-style-type: none"> 主体(実存、その子そのもの)として見る
その他		<ul style="list-style-type: none"> 45分間 ・児童生徒

(3) 今後の課題

本稿では、本科目の実施に当たって意図してきた「インプット→実践・体験→アウトプット」モデルの効果について、受講院生によるワークシート等の課題の記述内容を基に考察する形で検討したが、今後の定性的・定量的な視点を踏まえたより詳細な検証が求められる。また、本科目で取り上げた内容の順序性や学部卒院生と現職教員院生、特別支援教育専門の有無等の立ち位置の違いや実態差についても焦点化し、その効果について検討していくことが必要であると考えている。これらの効果検証を踏まえた、受講院生それぞれのより「深い」学びの実現のための授業改善が求められる。なお、これらの知見は、学校現場における多様な教職員集団の学び合いを効果的に展開していく方策を検討する上でも有効であると考えられる。

さらにはカリキュラム・マネジメントの視点から、本科目で学修したことを他の科目や実習で活用できるよう、履修モデルを提案していくことや学修ポートフォリオを活用することも今後の検討課題として挙げられる。

IV おわりに

本稿は、本専攻における発展科目「特別支援教育の授業デザイン」における授業内容の取り扱いと効果的な展開の在り方について検討することを目的に、受講

者のワークシート、授業における発言や課題等から分析を試みた。その結果、講義内容を踏まえた演習や特別支援学校での授業見学や体験を取り入れ、その報告や省察、共有等を行うことによる、インプット-実践-体験-アウトプットモデルのサイクルを通して、認知-行動-ICT活用等の特別支援教育において必要とされる専門知識の咀嚼と、主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた授業づくりに向けた気付きと理解の深まりが確認された。また、現職院生と学部卒院生の学び合いを通じた相互作用が確認され、今後の改善・充実のための示唆を得ることができた。

付記 本稿をまとめるにあたり、ご協力いただきました院生の皆様に深謝します。

文献

- 中央教育審議会（2021）「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）。
- 菊地一文・川島民子・佐藤晋治・坂本裕（2021）インクルーシブ教育システム時代の教員養成と現職教員の資質・能力向上への支援―異なる立場の学び合いや省察が資質・能力向上に及ぼす影響―。日本発達障害学会第56回研究大会論文集，日本発達障害学会。